

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(7)
講題：全球化時代的《故鄉／異鄉》—音樂家江文也為例

塚本善也
(2025. 10. 30)

摘要

本週演講的講師為本校日文系塚本善也教授，標題為「全球化時代的《故鄉／異鄉》——以音樂家江文也為例」。首先，塚本善也教授從「什麼是全球化時代？」這一問題出發，談論了在這個時代所發生的各種變化。

一、全球化時代的各種變化

所謂全球化時代，可以說是「以過去前所未有的速度進行地球規模的人員移動、物品與資訊擴散的時代」。在這樣的時代中，出現了無法融入既有概念框架的現實情況。例如，關於國境、國籍、國民、市民等的問題。居住在日本的外國人、異民族居民與移民人數逐年增加。父母、子女與兒孫輩對日本的意識必然有所不同，對各世代而言，國家是什麼？祖國在哪裡？換言之，對《故鄉／異鄉》的意識也會有所差異。

本講座中介紹了來自臺灣的早稻田大學教授陳天璽的案例，並提及在全球化時代作為「無國籍者」生活的可能性。關於《故鄉／異鄉》的問題，也可見於戰前日本的殖民地出身的日本人。本講座引用的例子是出生並成長於韓國慶州的作家森崎和江。森崎的身份認同無法和慶州與日本這兩個祖國切割。對於戰前出生於臺灣的日本人，即所謂的「灣生」也是類似的情況。

二、關於江文也

本講座首先介紹了音樂家江文也(1910-1983)的生平經歷。他的音樂活動起初以歌手的身份展開，後來轉向作曲領域，並在兩個方面都取得了卓越的成就。從他自作詩《天才》的標題中可窺見，江文也的個性可謂桀驁不馴，但這也可以視為他對統治國日本以及日本音樂界的一種對抗表現。

三、作為「異鄉」的日本

日本的音樂界以東京音樂學校為首，由山田耕筰與信時潔領導，成為主流。江文也有幸得以向山田學習，但隨著時間推移，他逐漸加深了對師長的批判。山田是奠定並引領日本音樂界的大師，對山田的反抗，最終也象徵著對整個日本音樂界的挑戰。這一點在他於1936年奧運獲獎時所發表的言論「我想建立真正的東洋音樂」中表現得十分明確。

四、作為「故鄉」的臺灣與「亞洲」的發現

江文也的出道作品《白鷺之幻想》，是在參加由在東京的臺灣留學生所組成的「鄉土訪問音樂團」(1934年8月11日至19日)並返回臺灣探鄉時萌生的。江文也在田園中看見白鷺的平凡景象，從中發現了「故鄉」，並感受到「古老的亞洲」在自己體內甦醒。塚本教授引用了室生犀星著名的詩作〈小景異情—其二〉，

指出「故鄉」是由離鄉者所發現的，而透過詠唱＝想像，「故鄉」得以被表象化，並指出《白鷺之幻想》的創作過程正是這一現象的實例。

對江文也而言，臺灣與日本既是「故鄉」，也是「異鄉」。本講座的結論之一為：江文也的代表作《臺灣舞曲》與《白鷺之幻想》，正是在這樣的「故鄉」與「異鄉」之間創作而成。

關鍵詞：《故鄉／異鄉》、山田耕筰、「鄉土訪問音樂團」、「白鷺之幻想」、「台灣舞曲」

塚本善也 整理

中文翻譯 CHATGPT/陳順益修改

2025.11.2

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座

第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(7)

講題：グローバル時代の《故郷／異郷》—音楽家江文也を事例に

塚本善也

(2025. 10. 30)

要旨

本講演の表題は「グローバル時代の《故郷／異郷》—音楽家江文也を事例に」である。まず塚本善也講師は「グローバル時代とは何か？」の問いから始め、この時代に生起しているさまざまな変容について語った。

1. グローバル時代の様々な変容

グローバル時代とは、「過去に例のない速度と地球規模で人が移動し、物・情報が拡散する時代」ということができる。そのような時代に、従来のさまざまな概念には収まらないような現実が生じている。例えば、国境、国籍、国民、市民等に関するものである。日本に暮らす外国人・異民族の居住者・移住者の数は年々増加している。親と子供・孫で日本に対する意識は異なるはずで、各世代にとって国とは何か、祖国はどこか、換言すると、《故郷／異郷》に対する意識は違っているであろう。本講座では台湾出身の陳天璽早稲田大学教授の事例を紹介し、グローバル時代に「無国籍者」として生きる可能性に言及した。

《故郷／異郷》をめぐる問題は、戦前日本の植民地出身の日本人にも見ることができる。本講座で引例したのは、韓国慶州で生まれ育った作家森崎和江で

ある。森崎のアイデンティティは慶州および日本の二つの祖国と切り離せなかった。戦前台湾生まれの日本人、所謂湾生にとっても同様のことが指摘できる。

2. 江文也について

本講座では、まず音楽家江文也（1910-1983）の経歴を紹介した。彼の音楽活動は歌手として始まり作曲へ移行し、どちらの部門でもめざましい成果成績を残した。自作詩「天才」の表題に窺えるように、文也の個性は傲慢不遜ともいうべきものであったが、それは統治国日本および日本音楽界への対抗の現われでもあった。

3. 「異郷」としての日本

日本の音楽界は山田耕筰と信時潔を戴く東京音楽学校を筆頭・主流とした。文也はその山田に学ぶ僥倖に恵まれたが、しだいに師への批判を深めていった。山田は日本音楽界を確立し牽引した大御所で、その山田への反発は畢竟日本の音楽界への対抗を意味した。そのことは 1936 年のオリンピック入賞に際しての発言「真の東洋音楽を建設したい」に明確に表われている。

4. 「故郷」台湾と「亜細亜」の発見

江文也のデビュー曲『白鷺への幻想』は、在東京の台湾人留学生による「郷土訪問音楽団」（1934 年 8 月 11 日-19 日）に参加し、台湾帰郷した際に芽生えた。田園に白鷺のいる平凡な風景に文也は「故郷」を見出し、また「古いアジア」が身内に蘇るのを感じたという。塚本講師は室生犀星の有名な詩「小景異情—その二」を引用して、「故郷」は離郷者によって見出されること、詠うこと＝想像によって「故郷」が表象されることを述べ、『白鷺への幻想』の創作過程にその実例が見られると指摘した。

江文也にとって台湾と日本はともに「故郷」でもあり、「異郷」でもあった。こうした「故郷」と「異郷」の間で、文也の代表曲『台湾の舞曲』や『白鷺への幻想』は創作されたというのが本講座の一つの結論である。

キーワード：《故郷／異郷》、山田耕筰、「郷土訪問音楽団」、『白鷺への幻想』、『台湾の舞曲』

塚本善也 整理

2025.11.2